

□名さへも知らぬ小鳥の歌

京都 今永英世

是れは始めての寫生ではありませぬが、小生等の如き初學者には先づ最初といふても差支はありますまい。

何分鄙地の事として紙や畫盤などは揃いましたが、三脚といふ氣のきいたものはありません。然りとて道の悪い所や疲れた時等に必要なることは毎度の經驗。何か代用する物がなと工夫する程に妙な道具を案出しましたそれを袋にし、辨當を腰にして野外へと飛び出しましたのは午前七時頃でしたらう。某社の東方河邊に倚り上流を眺むれば、軟風そよ／＼と來るに連れて名さへ知れぬ小鳥の歌が聞こえ、森の綠滴らむとする景色、翔すべき清らかなる水の靜かに流るゝ様、誠の風情かなと直ちに自製三脚を組み立て其上に「ハンカチーフ」を敷き、徐々と筆を下しますのに、何となく一種の快感にうたれ措く事能はずと云ふ次第でありました。斯も野外寫生は愉快な業かな間暇さへ得ば寫生のみと獨り約しました。何故そういふ風に感ずるかと云ふに、下手ながらも向ふの林の有様、水の清らなる邊、一

々形が出来てはありませむか!

嗚呼、これが奥を極むれば、あれが一々實物に優れた立派な畫が出来るかと思ふと何となく床かしく、有望で、畫ばかり描ふと決心しまして、酷しい感に陥つたのです。これが私をして將來「アーティスト」とせしめむとした一動機と云はねばなりません。かくも、戸外寫生が私に大なる感動を與へたと思ふと、誠に不思議な様です。晝飯も終へ日は既に西山に傾き彼の森の鳥もれぐらに急ぐ影を紙面に落しましたから漸く時の移りしを知りました。其間全く所謂「ホーリーロスト」であつたのです。これで、爾來益々畫を研究し、寫生を怠らず、水彩畫など稽古する氣は慥かめられました。

□小さな娘に動かされて 衣 江

中學三四年の時、初めて淺井氏の水彩畫帖を課せられました。元來、こんなものに趣味を持つて居なかつたので、繪畫の巧みな親しい人に頼んで、畫いて貰つて、先生の許へ出しますと、案の定最高點。その後、毎度この様にする中に五年級となり、繪畫科は廢

せられましたので、喞と一息吐いた事でした。

當時僕の居た中學では、畫の下手な奴は、いつも上手な奴に依頼して居たので、上手なもの、毎度、之に忙殺せられて居たのでした。中學を出てからは、繪畫の事などは、殆んど忘れた様でしたが、丁度僕の居た下宿屋に、八歳計りの娘がありました。それが、いつも學校友達を連れて來て、僕に畫を描けと云う、最初のうちは、雜誌の口繪の透き寫しなどして、誤摩化して居りましたが、遂には繪畫が面白くなり、妹の購つて居た女學世界の口繪の水彩畫などに注意する様になりました。處が、僕の友達に水彩をやる者が二三人あつて、愉快に畫いて居るのを、折々見せられるので、益々、興味を覺えて來、二年前から机の隅に投げ込まれた儘、手も觸れなかつた、水繪具を取り出す様になりました。而し調色の難いのと、手の動きが鈍いのと、一ヶ月の後は再び机の中へ投げ込んだまゝ捨てしまいました。然るに今春病痾を靜養せん爲、學をすて、歸省する事となり、水清き故郷の村落に放浪する間、無聊の餘り、再び畫筆を握り、爾後三ヶ月尙倦まずして繼續して居るです。